

[11]

氏名	陳蒙 ^{ちんもう}
博士の専攻分野の名称	博士（外国語教育学）
学位記番号	外博第28号
学位授与の日付	2021年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	授受補助動詞「テクレル」と「テモラウ」について ー使用実態からの中国における日本語教育現場への示唆を中心にー
論文審査委員	主査教授 高梨 信乃 副査教授 阿南 順子 副査教授 アンドリュー・バーク 専門審査委員 教授 建石 始 (神戸女学院大学)

論文内容の要旨

陳蒙氏の博士学位請求論文「授受補助動詞「テクレル」と「テモラウ」についてー使用実態からの中国における日本語教育現場への示唆を中心にー」は、以下の6章から構成されている。

第1章 序論

第2章 「～てくれる」の使用実態及びそれに基づいた日本語教育現場への示唆

第3章 「～てくださる」の使用実態及びそれに基づいた日本語教育現場への示唆

第4章 「～てもらう」の使用実態及びそれに基づいた日本語教育現場への示唆

第5章 「～ていただく」の使用実態及びそれに基づいた日本語教育現場への示唆

第6章 まとめ

資料

参考文献

本論文は、日本語の文法の難点の一つである授受補助動詞について、中国人日本語学習者への教育の改善を目指して、新たな考察を加えるものである。

具体的には、授受補助動詞「テアゲル」「テクレル」「テモラウ」という3系列のうち、「テクレル」（「～てくれる」とその待遇形式「～てくださる」）と「テモラウ」（「～て

もらう」とその待遇形式「～ていただく」)を対象とする。これら4形式について、書き言葉と話し言葉のコーパス調査を通じて母語話者の使用実態を調べ、その結果に基づいて中国で使用されている教科書における4形式の扱いを詳細に検討する。そして、検討の結果をもとに、4形式についての指導の内容と方法をより日本語の使用の現実に即したものに改善するための具体的な提案を行っている。

以下、各章の内容を述べる。

第1章では、本論文の研究背景と研究目的を述べ、研究対象について説明している。研究背景として最初に述べられるのは教科書の問題である。教科書は中国における日本語学習者にとって主たるインプットであり、学習に多大な影響を与えるものであるが、現行の教科書には記述が不十分な点、妥当性に欠ける点、また日本語の使用の実態に合致していない点が少ない。また、現場で教える中国人日本語教師は、母語話者のような言語直観を持っていないため、自身の判断で教科書の不備を補うことが難しい。本論文はこのような認識から、教育現場に向けた文法形式についての知見として、a) 日本語母語話者が実際にどのような場面で、どのように使っているのか、b) 現行の教科書における文法解説は学習者の必要に対応しているのか、例文提示は母語話者の使用実態を反映しているのか、という2点を明らかにすることが必要だと主張する。そのうえで、授受補助動詞「テクレル」「テモラウ」を対象に、次の3点を研究目的として挙げる。

- a) コーパスを用いて「テクレル」「テモラウ」の使用実態を明らかにする。
- b) 中国の日本語教科書において「テクレル」「テモラウ」がどのように扱われているかを明らかにする。
- c) 上記のa) b)の結果に基づき、教科書における扱いの妥当性を使用実態に照らして検討し、問題点を指摘する。そのうえで、各教科書を用いて「テクレル」「テモラウ」を指導する際の留意点について提言する。また、中国人日本語教師が教える際に役立つ文法解説を提案する。さらに、今後新しい教科書を作成する場合に向けて「テクレル」「テモラウ」の扱いについて提言する。

続いて、研究対象である「テクレル」「テモラウ」について、先行研究を踏まえつつ、本論文の考察の枠組みを示す。「テクレル」と「テモラウ」の使用には、依頼などの行為を要求する場面に使われるもの(例:「山下くん、ちょっと来てくれ/来てください」「先生、推薦状にサインしてくれませんか/してくださいませんか/してもらえませんか/していただけませんか」)のようなものと、それ以外の場面に使われるもの(例:「先生は推薦状にサインしてくれました/してくださいました/してもらいました/していただきました」)のようなものが存在する。本論文では、前者を「行為要求」、後者を「叙述」と呼び、4形式に関してそれぞれ「行為要求」と「叙述」に分けて考察すること、かつ、その際、同じ系列に属する「～てくれる」と「～てくださる」、「～てもらおう」と「～ていただく」に共通の観点をを用いることが示される。さらに、調査対象とする4種の教科書(『日語総合教程』『新編日語(重排本)』『総合日語(修訂版)』『新総合日本語 基礎日語(第2版)』)と、使用する4種のコーパス(書き言葉:『現代日本語書き言葉均衡コーパス』、話し言葉:『名大会話コーパス』『現日研・職場談話コーパス』『談話資料日常生活のことば』)を、

それらを取り上げる理由とともに紹介する。

第2章では、「～てくれる」について考察を行っている。まず、使用実態調査により、「～てくれる」は「叙述」のほうが多く出現し、全体の85%近くに達していることが明らかになったことから、教育現場では「行為要求」より「叙述」のほうが指導の優先度が高いとする。そして、「叙述」の「～てくれる」に関して、主に機能の面から詳細に考察し、結果として、「～てくれる」には「視点明示機能」と「恩恵表示機能」をもつ「～てくれる」と「恩恵表示機能」のみをもつ「～てくれる」の2種類が存在すること、また、それぞれにおける「～てくれる」の機能がその前にくる動詞とかかわることを明らかにする。そのうえで、これらの使用実態調査の結果と照らして、4種の教科書における「～てくれる」の扱いを詳細に調べ、その妥当性を検討する。最大の問題点としては、いずれの教科書においても、「視点明示機能」をもつ「～てくれる」ともたない「～てくれる」が区別されていないこと、言い換えれば、授受補助動詞のみならず日本語文法において重要ともいえる、視点についての説明が欠如していることが挙げられる。この問題点は学習者にみられる「～てくれる」の非用との関連も考えられることから重視すべきだという。教育現場への提案としては、この「視点明示機能」の有無による2種類の「～てくれる」を区別して提示することを中心に、現行の教科書を用いる場合の留意点と、新しい日本語教科書を作成する場合の提案が示されている。また、「行為要求」の「～てくれる」に関して、使用実態と教科書での扱いが同様に照らし合わされ、結果として、「～てくれる」の肯定疑問形式と否定疑問形式より命令形を優先的に提出すること、さらに、行為要求の下位類である「依頼」「勧め」「指示」という機能の区別に関する説明を加えることなどを提案している。

第3章では、「～てくださる」について考察している。「～てくれる」と比べて動作主を高める働きをもつ「～てくださる」は、使用実態調査の結果、主に「行為要求」として使われていることが明らかになったことから、「～てくださる」については「叙述」より「行為要求」のほうで指導の優先度が高いとする。

そのうえで、「行為要求」の「～てくださる」に関して、「依頼」と「勧め」として用いられる場合がいずれも全体の約40%を占め、「指示」は20%前後であることや、出現形式は命令形が最も多いことなどを明らかにしている。そして、4種の教科書における「～てくださる」の扱いについては、「依頼」「勧め」といった機能に関して説明が不十分である点や、説明と例文が一致しない点などを挙げ、機能についての指導の不十分さを指摘している。また、「叙述」の「～てくださる」に関しては、「～てくれる」と同じく「視点明示機能」および「恩恵表示機能」の面から考察を行い、結果、主たる提案として、「叙述」の「～てくださる」を「～てくれる」の提出の後で導入することと、「視点明示+恩恵表示」の「～てくださる」と「恩恵表示のみ」の「～てくださる」を区別した上で提示することを示している。

第4章では、「～てもらおう」を取り上げている。使用実態調査の結果、「叙述」が圧倒的に多く出現していることから「行為要求」より「叙述」のほうを優先して指導する必要があるとする。そのうえで、「叙述」の「～てもらおう」に関して、主に働きかけ性と格表示の面から考察を行っている。働きかけ性の有無は、それによって中国語の対応表現（“請”を含

む文になるかどうか)が異なることから重要であるという。また、格表示に注目する理由は、動作主や動作の受け手の表示が省略されている文は学習者の理解に混乱を招きやすいことからである。考察の結果、働きかけ性に関しては、「～てもらう」には①使役型(働きかけがあるもの)、②受動型(働きかけがないもの)、③使役と受動のいずれとも解釈できるものの3種類が存在し、そのうち①使役型が圧倒的に多いことが明らかになった。格表示については、「～てもらう」においては、動作の受け手と動作主が両方とも省略されている文が最も多く、動作の受け手と動作主が両方とも明示されている文が最も少ないことが明らかにされている。これらの結果と照らして、4種の教科書における「～てもらう」の扱いを考察したことにより、「叙述」の「～てもらう」の指導の改善案として、母語話者の最も多く使っている働きかけのある用法を優先的に導入することと、提出する際に動作主も動作の受け手も省略された文を取り上げることを提案している。また、「行為要求」の「～てもらう」に関しては、母語話者の現実の使用において主に「依頼」として使われているということから、「依頼」において多く現れた「～てもらえる」の疑問形と「～てもらいたい」という2形式を提示すれば十分であるという主張を示した。

第5章では、「～ていただく」について考察を行っている。まず、使用実態調査の結果、「～ていただく」も「～てもらう」と同様に「叙述」の方が多く出現していることから、「行為要求」より「叙述」のほうが指導の優先度が高いとする。そのうえで、「叙述」の「～ていただく」に関しても「～てもらう」と同じく働きかけ性と格表示の面から考察を行う。その結果、「～ていただく」についても、「～てもらう」と同様に、①使役型、②受動型、③使役と受動のいずれとも解釈できるものの3種類が存在し、そのうち①使役型が圧倒的に多いということ、しかしながら、②受動型の「～ていただく」は「～てもらう」より出現率が高いということを指摘している。また、「～ていただく」における格表示については、「～てもらう」と同じく、動作の受け手と動作主が両方とも省略されている文が最も多く、動作の受け手と動作主が両方とも明示されている文は少ないということを示している。使用実態調査の結果を踏まえて4種の教科書を検討した結果、「叙述」の「～ていただく」の指導については、「～てもらう」を提出してから、使用頻度が最も高い働きかけのある用法を優先的に導入することと、提出する際に動作主も動作の受け手も省略された文を取り上げることを提案する。さらに、働きかけがない「～ていただく」に関して、現実の使用においてその出現率が「～てもらう」より高いということを考慮し、働きかけのある「～ていただく」を提出してから別の課で、産出は求めず理解できればよいという方針で提示することを提案している。また、「行為要求」の「～ていただく」に関しては、その出現率が「～てもらう」より高いことから、学習者に紹介する必要があること、特に、使用頻度の高い「依頼」の「～ていただける」の疑問形と「～ていただきたい」の2形式を提示することが望ましいことを主張する。

第6章では、本論文の研究内容をまとめた上で、今後の課題について述べている。本論文で残される課題として挙げられているのは、①「使役+授受補助動詞」に関わる各形式についての考察、②授受補助動詞「テアゲル」に関する考察、③本論文で提出した「テクレル」と「テモラウ」の指導に関する改善案の有効性を教育現場で検証することの3点である。

論文審査結果の要旨

論文の提出に先立ち、提出要件審査委員会（委員：高梨信乃、アンドリュー・バーク、阿南順子）は、陳蒙氏が本研究科の定める「博士論文（課程博士）審査に関する覚書」の論文提出基準を満たしているかどうかを確認した。その結果、同氏は（１）必要単位（10 単位）を取得済みであり、博士論文のテーマと関連する分野で（２）論文3 編（うち 2 編が査読あり）、（３）口頭発表 3 回（うち国際大会 1 回、全国大会 2 回）を有し、（４）博士論文聴聞会（2020 年 8 月 7 日開催）も重大な問題の指摘なく終了していることから、論文提出のすべての要件を満たしていることが確認できた。よって、その旨を研究科委員会（2020 年 9 月 23 日開催）に報告し、同氏からの論文提出を認めるとの了承を得た。その後、2020 年 10 月 30 日に 陳蒙 氏から提出された論文を学位請求論文として受理し、研究科委員会（2020 年 11 月 25 日開催）において承認された論文審査委員会（主査：高梨信乃、副査：アンドリュー・バーク、副査：阿南順子、学外委員：建石 始 神戸女学院大学教授）での審査に入った。また、同時に所定の手続きと閲覧期間をもって、研究科構成専任教員への論文開示も行った。

提出された論文は、ほぼ 300 頁におよぶ大部なものであり、参考文献の数は 165 編にのぼる。

本論文は「テクレル」と「テモラウ」についての中国人日本語学習者の疑問や困難点に正面から取り組むものである。中国の大学で数年にわたり日本語教育に従事してきた陳蒙氏の教育現場に根差した明確で具体的な問題意識から出発しており、かつ、その教育現場への示唆を目指すという姿勢が論文全体に貫かれている。これは、外国語教育学分野の博士論文として極めてふさわしい点であり、本論文の優れた点といえよう。

上記に加え、本論文の優れている点は以下のようにまとめられる。

- i. 日本語母語話者の使用実態について、書き言葉と話し言葉の複数のコーパスを用い、丁寧に精度の高い分析を行っていること
- ii. これまであまり調査されていない、中国の高等教育機関の教科書を対象として、細部にわたる調査を行っていること
- iii. 授受補助動詞やその周辺に関する膨大な先行研究を十分に把握・消化していること
- iv. 調査結果に基づいて、堅実で受け入れやすい議論が行われていること
- v. 論文全体がバランスよく整然と、また、各章の間に緊密な関連をもたせながら構成されていること

以上のことから、陳蒙氏の学位請求論文が、研究の方法や内容、記述の体裁や論理などすべてにおいて、本研究科の博士号に値する水準に達していることを、審査委員会一同が認めた。